

[社会]

社会的事象に自分を近づけ、問題解決に向けて多面的・多角的な視点で考えをもつ児童の育成

— 小学校第4学年「水はどこから」の実践を通して —

宮越 俊宏*

1 はじめに

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編の第4学年目標において、「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度やよりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う」とある。澤井（2019）は、「社会的事象は子供からもっとも遠い場所にある」とし、「人ごとの問題について、問題解決を通じて徐々に身近な距離に引き寄せていき、社会的事象の『追究』を自分ごとにする、これを『主体的な学習』と呼ぶ」としている。

しかし、これまでの筆者の社会科授業を振り返ると社会的事象に児童が近づいているとは言い難い。授業後の児童の振り返りでは、「〇〇が分かった」「すごいと思った」「これからは〇〇していきたい」など、遠い事象として捉えていたり、ありきたりな言葉を書いたりする記述が多く見られた。これでは、社会的事象に自分を近づけ、主体的に問題解決したり、いろいろな立場や視点で考えたりすることは望めず、よりよい社会を考え、地域社会の一員として児童自身が将来を見据えた学習になっているとは言えなかった。

長橋（2020）は、見学の目的を焦点化することで、見学したことが社会的事象と自分をつないだと述べている。そして、対立軸のある学習問題を作り、自分の立場をはっきりさせることで自分の考えの根拠を資料に求める姿につながったり、話し合いを通して多角的な視点を獲得して、自分の考えを再構成する姿につながったりしたとしている。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により見学に行けないために、見学を通して社会的事象と自分をつなぐことが難しかった。

そこで、児童の思いや願いを汲み取りながら、社会的事象と関連する体験を行うことで、自然と社会的事象と比較するきっかけを生み出し、結果として生活から遠く離れた社会的事象に児童が近づくことを目指す。さらに、問題解決に向けて、資料や友達の発言を手掛かりにしなが、多面的・多角的な視点でよりよい社会の実現につながる考えを児童がもつことを目指す。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究の目的は、社会的事象と関連する体験を通して、社会的事象に自分を近づけ、「自分と関係のある問題」として捉え、自分の立場やこれまでの視点にとらわれず、必要な情報や友達の考えを基に多面的・多角的に考え、自分たちの将来についてよりよい考えを児童がもつことを目的とする。

(2) 研究の方法

① 社会的事象と児童を近づける体験の設定

児童が社会的事象を「自分から遠く離れたこと」「自分たちとは関係ないこと」と考えているのは、児童にとって自分事ではなく、教科書の中での出来事になってしまう。これでは、主体的な学びは期待できない。社会的事象と児童が近づく手立てとして、実物を見たり、専門的な話を聞いたりすることが挙げられるが、コロナ禍において見学などの学習は制限されてしまう。そこで、社会的事象と関連する体験を行うことを通して、遠く離れた社会的事象に児童が近づき、興味・関心を高めることを目指す。

*長岡市立表町小学校

② 体験から得た気付きや思考と、社会的事象とを比較する活動の設定

児童は体験を通して、五感を用いて様々なことを感じ、教科書からでは得られない気付きや思考が生み出されると考える。児童の気付きや思考を見取り、社会的事象と比較することで、児童の中で学びを深めたり、新たな課題を見出したりする姿を目指す。

③ 立場に分かれて課題について話し合い、自分の考えをつくる場の設定

社会的事象について様々な視点で捉えるためには、まず自分の考えをもつことが必要となる。自分の考えをもつためには、児童が明確に立場を選択できるような話し合いのテーマを設定することが重要である。そこで、社会的事象の課題に関わり、将来的に起こりうる可能性のあるテーマを取り上げ、立場を選択して話し合う場を設定する。自分とは異なる立場の根拠を聞くことで、社会的事象について見方を広げたり、多面的・多角的に考えたりしながら自分の考えを再構成する姿を目指す。

3 授業の実際

(1) 単元名 「水はどこから」

(2) 単元の目標

安全で安定的に供給している水道事業の仕組みや役割などを体験や資料を活用しながら調べることを通して、理解するとともに、水道事業の課題について話し合い、地域の人々の生活を支える水道事業について多面的・多角的な見方で捉え、考えるようにする。

(3) 単元の評価規準

知識・理解	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
体験して得た気付きや思考したことと社会的事象を比較しながら、安全で安定的に供給している水道事業の仕組みや地域の人々の生活に役立っていることを理解している。	体験したことと水道事業の仕組みを比較したり、水道事業の役割や課題について地域の人々の生活と関連付けて考えたりして、将来の水道事業について多面的・多角的な見方で捉え、考えを表現している。	水道事業の仕組みや役割について関心をもち、意欲的調べたり、考えたりしている。 地域の人々の生活を支える水道事業の将来について自分や身近な人の生活と関連付けて考えようとしている。

(4) 単元の指導計画（全15時間）

次（時数）	◆学習内容	○学習活動	主な評価規準と方法（□）
1 (1)	◆身の回りにある水を比較し、これからどんな活動をしたいか見通しをもつ。	○水道水、プールの水、メダカの水、池の水、川の水を視覚や嗅覚を使って比較する。	身の回りの水に関心をもち、これからの学習への意欲を高めている。 □ノート
2 (2) (3～5)	◆手作りろ過器を作るためにどんな材料や道具が必要か調べる。 ◆ろ過器作りやろ過の様子、ろ過後の水の様子を観察して、気付いたことや感じたことを明らかにする。	○インターネットを活用し、必要な材料や道具をノートにまとめる。 ○ろ過器を作り、メダカや池の水をろ過し、その様子やろ過後の水の様子を観察する。	手作りろ過器を作るために必要な情報を集め、ノートにまとめている。 □ノート ろ過器作りやろ過の様子、ろ過後の水の様子を観察し、気付いたことや感じたことをまとめている。 □ノート
3 (6) (7) (8・9)	◆ろ過した水量でできることを考え、水道水を作る仕組みに関心をもち。 ◆1日の水の使用量とろ過した水量を比較し、生活に必要な水量を実感する。 ◆浄水場の仕組みや役割、そこで働く人の思いを調べる。	○クラスのろ過した水を集め、全ての水量でできることは何か考える。 ○1日の水の使用量を計算し、ろ過した水量の何倍か計算する。 ○浄水場の仕組みについて手作りろ過器や水作りの体験と関連付けてまとめる。 ○副読本を活用し、浄水場の役割	体験・実感したことや数値の比較を通して、気付いたことや感じたこと、考えたことをまとめている。 □ノート 浄水場の仕組みについて手作りろ過器や水作りの体験と関連付けてまとめている。 □ノート 映像や副読本を活用し、浄水場の役割や働く人の思いをまとめている。 □ノート

(10・11)	◆水道水と天然水を比較しながら、水道事業のメリット・デメリットに気づき、水道事業の課題を見出す。	や働く人の思いをまとめる。 ○水道水と天然水を飲み比べる。 ○味やにおいを比較して、それぞれのメリットやデメリットを話し合う。	水道水と天然水を飲み比べ、それぞれのメリットやデメリットを比較して、考えたことや気付いたことをまとめている。□ノート
4 (12～15)	◆「長岡市の水道事業をどうしていくと良いか」というテーマで話し合い、水道事業についての考えをもつ。	○「公営持続」か「水道民営化する」のどちらかに立場を決め、その理由や根拠となる資料を調べ、討論する。	将来の水道事業について多面的な見方で捉え、考えをまとめている。□ノート

※下線部は2(1)社会的事象と児童を近づける体験、波線部は2(2)体験して得た気づきや思考したことと社会的事象とを比較する活動、点線部は2(3)立場に分かれて課題について話し合い、自分の考えをつくる場の設定を表す。

(5) 活動の実際

① 社会的事象と児童を近づける体験の設定

第2次 ろ過器作りやろ過の様子、ろ過後の水の様子を観察して、気付いたことや感じたことを明らかにする。

第2次は、手作りろ過器による水作りを通して、自分できれいな水を作ることの大変さや難しさについて実感を伴って知ることを目的とした。そして、きれいで安全な水を大量に安定的に供給している水道事業や浄水場への興味・関心を高めることを目指した。1時間目は、身の回りにある様々な水を比較した際には、過去にろ過器を作って水作りをしたことがあるという児童の発言をきっかけに「ろ過器を作って、きれいな水を作りたい」という思いを高めた。2～4時間目は、必要な材料や作り方を調べ、ペットボトルろ過器を作成した。作る際は、小石や砂を水で洗ったが、1回洗ったぐらいではなかなか汚れが取れず、洗っては流すという作業を何度も繰り返した。5時間目は学校の敷地内にある池の水を実際にろ過した。授業後の振り返りは以下の通りである(表1)。

表1

水作り体験後の振り返り
<ul style="list-style-type: none"> ・最初に入れたときは何か濁っているなあと思って大丈夫かなあきれいになるかなあと思いました。出てきた水は入れた前よりもきれいになっていました。驚いたのが砂です。ほとんど濡れていたの、出てきた水は泥水になりそうだなあと思ったけどならなかったのそれで驚きました。 ・ろ過してみてもすごく濁ったような感じになってしまった。

水作り体験をしたことで、きれいな水を作ることの大変さや難しさを実感したことが分かる。また、汚い水や汚れた材料を使って、きれいな水が出てきたことから驚きの気持ちが生まれたことも読み取れる。そして、体験が児童の水作りへの興味・関心を高めることにつながった。

第3次 10時間目 水道水と天然水を比較しながら、水道水のメリット・デメリットに気付く。

10時間目は、水道水と天然水の飲み比べを通して、水道水と天然水の違いを比較し、水道事業の良さを再認識したり、課題を浮き彫りにしたりすることを目的とした。前時では、浄水場の仕組みやそこで働く人の様子について水作りを通して得られた気づきや思考と比較し、浄水場の安全性や安定性について確かめた。

10時間目の最初に、水道水と天然水の飲み比べを行った。水道水は「少し塩素のにおいがある」「普段飲んでいるから美味しく感じる」天然水は「ほんの少し味がある」「においがいい」という反応があった。その後、それぞれの良い点を出しながら比較を行った。水道水の良さは「安心・安全であること」が意見として出た。天然水の良さは「持ち運びができること」「災害時に使える」「量が丁度いいこと」「自販機で売っている」が意見として出た。「安心・安全」という点に関しては、両方の検査項目数を資料として提示した。児童は水道水の検査項目数の多さに驚いていた。一方で、「災害時に使える」という点に関しては、水道水はデメリットになりうるということが明らかになった。児童も災害によって水が止まることをニュースで知っていた。また、児童から出てこなかった視点として、経済性についても触れた。ペットボトルの水よりも水道水の方が格段に安いこと(1Lあたり0.1円)を共有した。どちらもメリットがあること、使用目的や場面によって選択できることが明らかになった。また、水道水は安全性、安定性、経済性が優れていることを改めて再認識できた反面、災害などの有事の際には安定供給できなくなることが浮き彫りになった。授業後の振り返りは以下の通りである(表2)。

表 2

水道水と天然水の比較後の振り返り
<ul style="list-style-type: none"> ・家で使うとしたら水道水です。外で使うとしたら天然水。理由はコンパクトで持ち運びが便利だから。 ・ペットボトルは災害のときにすごい助かると思った。 ・水道水は金が安いし検査をたくさんしているから飲みたいと思った。

水道水の安全性や経済性にメリットがあることを理解していることが読み取れる。一方、持ち運びという視点でペットボトルが良いと考えていることが分かる記述もある。飲み比べという体験をきっかけに水道水と天然水の比較を自然と引き出し、自分たちの気付きからさらに視野を広げ、水道水の良さを再認識したり、課題を見出したりすることにつながったと考える。

② 体験から得た気付きや思考と、社会的事象とを比較する活動の設定

第3次 6時間目 ろ過した水量でできることを考え、水道水を作る仕組みに関心をもつ。

6時間目では、ろ過した水の量でできることは何か考えることを通して、水道水を作る仕組みに関心をもつことを目的とした。最初に、全員で作った水を集め、全部の量がどれぐらいなのか量った。作ったろ過器は17台あったが、失敗した児童もいたため、きれいな水だけを集めた結果は800mLであった。その後、800mLでできることについて普段の生活を想起しながら、意見を出し合った。「顔を洗う」「うがい」「カップラーメンだったら3個ぐらい作れる」といった意見が出てきた。また、「ほとんど何もできない」「洗濯ができない」「風呂に入れない」といった意見も出た。

第3次 7時間目 1日の水の使用量とろ過した水量を比較し、生活に必要な水量を実感する。

7時間目では、1日の水の使用量を計算することを通して、生活にどれだけの水が必要なのか実感することを目的とした。ろ過した水の量と比較することで、より強く実感できるようにすることを目指した。

前時の振り返りに「トイレもできないし、水筒も作れない。お風呂も入れない生活はしんどい、生きられない」という記述があり、それを取り上げたことで、「1日にどれぐらいの水を使っているのか」という問いがクラスの中に生まれた。そこで、1日の水の使用量を計算した。計算し終わった後、どれぐらいの水を使っていたか児童たちに聞くと、全員が200L以上の水を使っていることが分かった。300Lを越える児童もいた。そして、1日300L使った場合、800mLの何倍の水の量なのかを計算した。結果は375倍であった。児童がろ過して作った水の375倍の水を使っていることに驚いていた。

表 3 A児の振り返り

A児の振り返り	
6時間目	私は800mLもきれいで透明の水ができるなんてびっくりしました。800mLは1日で1時間ぐらいで水はなくなっちゃうと思います。なのでお水は1日800mLは絶対に足りないし、1日だったら約2倍の2Lぐらいの水は1日で飲むと思います。この水の量だと生活は絶対に無理。
7時間目	水を計算してみると1日1人で252Lほど使っているなんてすごいいいと思いました。あと252Lの水が1週間で使うことになるので252L×7日で約1764Lほど使います。びっくりしました。それにきれいな水の800mLの375倍もつくらなきゃいけないなんて5年ぐらい作るのにかかりそうです。絶対にできない。

右の表はA児の6、7時間目の振り返りである。A児はろ過器作りがうまくいかなかったため、周囲の児童と比べてもより強い感情が伴った経験をしていると考えた。自分の経験を基準にしたことで、水を作ることが大変であることがより鮮明になるとともに、いかにたくさんの水を使っているのか驚きを伴って理解につながっていると考えられる。さらに、浄水場が毎日作っている水の量と比較することで、より強い驚きの感情が生まれた。体験から得た気付きや思考を社会的事象と比較することによって情意が付随した知識・理解につながったと考える。

③ 立場に分かれて課題について話し合い、自分の考えをつくる場の設定

第4次 「長岡市の水道事業をどうしていくと良いか」というテーマで話し合い、水道事業についての考えをもつ。

第4次は、「長岡市の水道事業をどうしていくと良いか」というテーマに対して、「長岡市に任せる」（公営持続）か「民営化する」のどちらかの立場をとり討論した。友達の考えや必要な情報に触れ、多面的・多角的な見方で今や将来の水道事業について捉え、自分たちの将来にとって良い考えをもつことを目指した。12時間目は、水道事業の課題（水道管耐震化の遅れ、人口減少による料金収益の減少、技術者・働き手の減少、水道管老朽化問題）を復習し、水道民営化について映像をもとに学習した。そして、公営持続か水道民営化のどちらが市民にとって良いか立場を選び、立場ごとに分かれて必要な情報を集め、理由やその根拠を考えた。13時間目は、討論を行った。14時間目は、前時を経て足りなかった部分の情報を集め、再度理由やその根拠を考えた。15時間目は、再度討論を行い、最終的な自分の考えを書いた。

13時間目の1回目の討論の様子を詳述する。授業の冒頭の授業は、それぞれの立場から事前に考えられた意見が出た。最初は準備してきた意見で互いの意見を踏まえずに意見が述べられ、どこかかみ合っていないような印象があった。授

業の中盤に差し掛かった場面では、水道局の職員の減少の視点から意見が述べられた。教師が資料を提示しながら減少するイメージを膨らませる。そこから、水道民営化について安全性と経済性の視点での意見のやりとりが活発になった。水道民営化すると水道代が高くなるという意見が公営持続派から出たため、今後の水道代の予想推移の資料を提示した。実は公営持続でも水道代は高くなっていく予想であることが明らかになった。児童は今後どちらの立場も水道代が上がる可能性があるという課題を共有していく。そこで、「水道代を下げないのかな」と教師が投げ掛け、経済性の視点に焦点化してそれぞれの立場ごとで集まり話し合った(表4)。水道代を下げない方法がないか話し合った後には、「安全性をあえて下げる」「家庭用ろ過器をつける」という新たな視点からの意見が述べられ始めた。そうすることで、水道代を下げられると児童は考えた。また、生活経験で

表4 授業の様子

教師と児童, 児童同士のやり取り	
教師	「市はお金が高くなる可能性が高いですね。みんなが使う水道代が高くなりますね。水道代を抑える方法はないのかな。同じ班で同じ立場の人がいますよね。水道代を下げるにはどうすればよいか考えてみましょう」 (児童 立場ごとに話し合う。)
教師	「もどきましょう。」
D	「安全性をあえて下げて、家庭でろ過装置に近いものを用意すればいい。」
J	「家庭でろ過器を蛇口につけておけば、安全にできるからいいと思います。」
教師	「安全性を下げるとどうなるかね。」(家庭用ろ過機の資料を提示)
O	「どちらの意見でもさびは直さなくてはいけないから同じだと思います。」
H	「水が汚くなっても飲めるというのは危ないと思います。」
G	「貧乏の人は水道を買うのとそれを買うのは一緒だと思います。」
教師	「こういうのはどうかな。(家庭用浄水器の資料を提示)値段はどうだろうな。月3680円だって。そうすると、こういう(家庭用浄水器)のを買うっていうのも方法だよな。」
M	「資料に書いてあったんですけど、トイレの水は安全性を下げてもいい。」

浄水器を付けている児童もおり、「私の家にもそれあります!」と反応する児童もいた。さらに、「トイレの水は安全性を下げてもいい」といった意見もあった。これまでの視点にはない考え方を広げる意見であった。これまでの経験から反対する児童もいた。

14時間目は再度調べ学習を行い、15時間目にもう一度話し合いを行った。1回目の討論後は水道民営化の割合が半分近く減り、悩む立場が増えた。違う立場の意見を聞くことで、自分たちの立場のメリットだけでなく、デメリットがあることに気付いたことが特に水道民営化の立場の変化に作用したと考えられる(表5)。自分に必要な資料を自分の視点で探した後に行った2回目の討論後は公営持続の立場が約10%減り、水道民営化、悩む立場がそれぞれ少し増えた。

1人目の児童は1回目の討論後、出てきた意見を全て見直し自分の考えをつくり直していることが分かる(表6)。B児は働き手が高齢化しているという視点が新たな加わり、改めて立場を決めた。2回目には、ガスや電気といった他の事業の視点も加わった。話し合いの回数を重ねるにつれて視点が増えていることが分かる。2人目の児童は1回目の討論後に立場を選ぶ際に安全性と経済性が重要な視点であることに気付いた(表7)。2回目の討論の中で話題になったコンセッション方式という視点を心得、水道民営化の立場を選んだ。他の児童においては、話し合うことで、それぞれの立場のメリット・デメリットに気付いている記述を書く児童が34名中24名となった。また、新たな視点を書く児童が34名中19名となった。立場に分かれて話し合ったことで、自分の立場だけでは気付かなかったメリット・デメリットに気付くことにつながったと考える。また、様々な視点で意見を交わしたり、自分の立場に合う情報を探したりしたことで、新たな視点を心得、多面的に水道事業について考えることにつながったと考える。

表5 討論前と討論1回目, 討論2回目の立場の変化

	水道民営化	公営持続	どちらかで悩む
討論前	65%	35%	0%
討論1回目	30%	32%	38%
討論2回目	38%	21%	41%

表6 B児の振り返り

B児の振り返り	
討論前	私は水道を民営化した方がいいと思います。理由は安全になると安心して飲んだりできるし、自分で水を選べると好きなのが飲めるから。
討論1回目	話し合いで水道水について考えたこと、思ったこと。一通り見直したけど、やっぱり水道民営化の方がいいと思います。いる人が高齢化していつかはどんどん少なくなっちゃう。
討論2回目	考えたことはやっぱり民営化です。長岡市にこのまま任せると高齢化していつが大変なことになると思う。ガスや電気も民営化していつか水道も民営化した方がいいと思う。競争が生まれると経済にも影響がなくなるし、一度失敗したらその失敗した原因を考えて見直してまたやればいいと思う。

表7 C児の振り返り

C児の振り返り	
討論前	水道民営化がいい。理由はいろいろなサービスがあっていいし、修理のお金も集まりそうだから。
討論1回目	水道水について考えたこと・思ったことはどちらも良いところと良くないところがあり、お金、安全、安いという3点が関わってくるのが分かりました。
討論2回目	スピードは実行力は水道民営化の方が上。でも外国の会社に狙われたら・・・。そうしたらコンセッション方式にして、外国の会社はいっさい入れなくしたらいいと思う。

4 成果と課題

(1) 成果

① 社会的事象と児童を近づける体験の設定

社会的事象と児童を近づける体験を設定したことは、「浄水場の仕組み」や「水道事業」といった社会的事象への興味関心を高め、社会的事象の課題を見出すことにつながったと考える。そして、社会的事象への興味関心を高めたことや社会的事象の課題を見出したことが、社会的事象を自分と関係のある問題と捉えるのに重要な役割を果たしたと考える。なぜなら、高い意欲をもって調べ学習を行い、新たな資料や知識を得ようとする姿が見られたからである。また、課題を見出したことによって、児童たちが使う水道水への問題意識が高まったと考えるからである。

② 体験から得た気付きや思考と、社会的事象を比較する活動の設定

体験から得た気付きや思考と、社会的事象を比較する活動を設定したことは、「浄水場の仕組み」や「水道事業」について、体験から得た気付きや思考が伴った知識理解につながったと考える。そして、そこで得た知識が基礎となって、話し合いでは様々な視点からの意見を交流できたと考える。

③ 立場に分かれて課題について話し合い、自分の考えをつくる場の設定

立場に分かれて課題について話し合い、自分の考えをつくる場の設定は、児童が根拠のある考えをもつことにつながったと考える。根拠をもつことによって、自然と自分と他者との考えの比較を生み出し、多面的・多角的に水道事業について考えることにもつながった。また、立場が明確に分かれる課題の設定のみでは、社会的事象を自分と関係のある問題として捉えることにつながらないと考えた。手立て①と②によって、児童が社会的事象への興味関心を高め、知識を得て、課題を見出すことによって、自分と関係のある問題として捉えられると考える。したがって、単元構想の段階で、手立て①と②の視点から教材研究を行い、単元を進めていく中で明らかになった児童の興味関心や実態に合わせた課題を設定して話し合うことが重要であり、有効であったと考える。

(2) 課題

① 社会的事象と児童を近づける体験の設定

体験が中心になるため、体験を通して得た気付きや思考が知識に結びつかない児童もいた。体験には時間が多くかかったため、気付きや思考を言語化する時間がすぐに取れない時があった。気付きや思考が児童に残るように、体験後にすぐに振り返る時間を意図的に設定する必要がある。

② 体験から得た気付きや思考と、社会的事象を比較する活動の設定

体験から得た気付きや思考が伴った知識は、水道局の方から説明してもらったり、実物を見たりすることと比べると限られていたと考える。したがって、水道事業に携わる人の声などをインタビューするなどして、授業で取り上げ、児童の知識を広げたり、深めたりする必要がある。

③ 立場に分かれて課題について話し合い、自分の考えをつくる場の設定

自分と関係のある問題として捉え、話し合う姿につながった一方で、本時の座席位置や話し合いの形式をより検討しておく必要がある。1時間で多くの意見を交わしたり、同じ立場ですぐに相談できたりすることができれば、より様々な視点に触れ多面的・多角的に考えることにつながったと考える。また、話し合いを通して自分の考えを表出できなかった児童がいたため、表出できるようにしていく必要がある。今後はICTを活用しながら、どの児童も社会的事象を自分と関係のある問題として捉えられるようにしていきたい。

引用文献

澤井陽介「社会科の授業デザイン」東洋館出版社、2019、pp.73-75

長橋俊文「社会的事象と自分をつなぎ、問題解決を通して多角的に自分の考えを再構成する児童の育成－小学校第5学年『工業生産を指させる人々～工業の今と未来～』を通して－」上越教育大学教育実践論文第30集、2020、pp.49-55

文部科学省『社会科学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』日本文教出版、2018、p.48